

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2014年 9月 72号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com

来年度の奨学生は 181 人

高校奨学生は男女同数

30 人増やして 166 人

池内 秀樹 (事務局)

カンボジア新学期(10 月)に高校に進学する中学 3 年生と、それぞれ高校 2、3 年に進学する KEAF 奨学生の面接を主な目的として 6 月中旬、岡宮喜雄さんとカンボジアを訪問しました。その結果、来年度(2014年9月ー2015年8月)の KEAF-Japan 奨学生は、高校 5 校の 166 人となることが決まりました。今年度の 136 人から 30 人増やしました。

内訳はプレイヴェン州のプロモルプロム高 97 人、コンポントウラバイ高 44 人、タッコー高 11 人、プレアンドウン高 13 人、チョーテール高 1 人で、男女ともに 83 人ずつと、たまたま同数でした。

チョーテール高はベトナム国境に近いところで、昨年できたばかりで、プレイトープ中学で面接したうちの 1 人の女子生徒が家庭の事情で通学に比較的便利なこの高校に進学することになったのです。KEAF が同高校生徒に奨学生を出すのは初めてです。

教員養成所学生 8 人、大学生 7 人の奨学生が加わり、奨学生の総数は 181 人となります。

4 年間首席通して大学卒業

今回の訪問で 7 月に王立プノンペン大学クメール語科を卒業したリム・セーラさんに母校、プロモルプロム高校で短時間でしたが、会うことができました。KEAF 奨学生で大学を卒業するのは、2012 年 7 月プノンペン大学化学科を卒業し、コンポンスプー州の教員をしているレン・サイ君に次

いで 2 人目です。

彼女は入学以来 4 年間、学科の首席を通した努力家です。プロモルプロム高時代は KEAF 奨学生ではありませんでしたが、このように苦学を重ね、今、立派に社会に飛び立つ奨学生を見ると、本当にうれしい。

セーラさんは英語で「本当にありがとうございました。大学の先生の推薦で雑誌社への就職が決まっていますが、可能なら、日本にも留学したい」と紅潮した顔で晴れ晴れと語りました。

セーラさんに代わって新しく 1 人が奨学生になったので、大学生奨学生は 7 人と数は変わりません。来年にはさらにふたりが卒業の予定です。

英語で感謝の手紙

その 1 人、フット・ソクナさんにプノンペンで面接しました。彼女は英語でしたための KEAF への感謝の手紙をくれたので、紹介します。

「私はフット・ソクナです。プロモルプロム高の卒業生で、現在はプノンペン国際大学(PPIU)の 3 年生 2 学期目の学生です。学士号取得のための勉学に奨学金を下さっている方々に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。私は大学で勉強を続けられるとは全く思っていませんでした。しかしあなた方の支援のおかげで今、チャンスを得ています。私からはお返しできるものが何もありませんが、その代わり、一生懸命、勉強し、立派にこの大学を卒業できるよう努力いたします。皆様がたすべてのご健康を祈って」。

彼女は憲法、行政法、労働法、さらには、日本が作成に当たって支援したカンボジア刑法を学んでいて、卒業後は裁判所書記官になることを希望しています。

格差のさらなる広がりを実感

池内 秀樹

昨年に比べ、プレイベン州内の田舎道もだいぶ舗装が進み、雨期のスコールでぐちゃぐちゃのぬかるみ道になるところは減っていた。それだけを見ても、人々の暮らし向きは多少はよくなってきているように見えたが、生徒との面接や教職員との話を重ねるにつれて、むしろ格差が一層、広がっている印象である。と同時に、こういう状況の中で、1人ひとりへの奨学金はわずかなものではあっても、生徒たちにとっては大きな励ましになっていると実感した。

中退奨学生が8人

プロモルプロム高校では、ことしも奨学生8人が中退していた。連絡が取れなくなっているのが、正確なことは不明だが、大部分はプノンペンの縫製工場に出稼ぎに行ってしまったという。最低賃金が100ドルに引き上げられ、残業代を含めれば、120ー130ドルになるという話に、家計の助けになる、と考えて学校を中退してしまうというのだ。

昨年末からことし初めにかけてプノンペン郊外のある縫製工場で待遇改善を要求する労働争議が起き、ひとりが亡くなる事件があった。中退した女生徒たちがどんな生活を送っているのか、ちょっと気がかりなので、プノンペン近郊のこれらの工場地帯の様子を覗いて見た。

工場群はプノンペン郊外のあちこちに点在するが、とりわけベトナムのメコンデルタ地方に通じる国道2号線沿いに集中している。土地の造成がまだ十分に終わってないようなところに大きな建物が立ち並んでいた。首都近郊だというのに、道路は陥没だらけ。水溜りがあちこちあってそこをよけるように建設資材を運ぶ大型トラックがのろのろと行き交う。トラックの跳ね上げた水と雨期のスコールで一帯の道路はぬかっているうえ、陽に照らされて乾いた泥が建物にこびりつきどこも黄色っぽい。

道路脇はにわか作りの屋台がところ狭しと並んでいる。昼休みともなれば、周辺の工場から女工さんたちが繰り出してくる。三々五々、昼食を食べたり、弁当を買ったりしていた。古着を吊るした屋台もあり、お客は彼女たちである（右上の写真）。寄宿舎や下宿を覗く機会はなかったが、「あれが寄宿舎ですよ」と通訳のナットさんが指差す建物は、窓がほとんどない3階建てだった。その形状からいかにもたくさんの人を収容できるような印象だった。



タイ出稼ぎに異変、悲劇も

カンボジアが縫製など労働集約型の生産拠点になっているのは、隣国タイよりも安価な労働力を提供できるからだ。そのため、中国、韓国、日本、台湾、ベトナムなどの企業が出資する縫製工場が次から次へとプノンペン近郊に誕生している。プノンペン空港では、若い男女のグループがソウル便のゲートで出発を待っていた。韓国企業で働く出稼ぎ労働者だ。高校生の修学旅行のようにも見えるが、雇い主から支給されたのか、みな同じような作業服姿だった。

カンボジア人労働者はこのようにプノンペン、韓国ばかりでなく、隣国タイにも出稼ぎに行っており、タイへの労働人口の流出は70万人を超える。ほとんどが道路などの建設現場や縫製工場、水産物加工処理工場などで働く。

ところが5月末から6月中旬にかけてそのうち20万人以上が日に数万人単位で帰国するという騒ぎが突然、起きた。KEAFの現地での活動拠点、ネッルーンでは、ほぼ毎日、帰国した労働者たちを満載したトラックが通って行くのを見かけた。タイのクーデターで発足した軍事政権が児童労働や人身売買の取り締まりを強化する方針を打ち出したため、カンボジア人労働者の間で不安が広がり、パニック状態に陥ったのだ。

ここで明らかになったのは、旅券やタイの労働許可証を持たない、いわば、不法労働者が多かったことである。カンボジア旅券は一人当たり124ドルするうえ、入手に時間がかかる。さらにタイでの就労にも2万バーツ（約6万2千円）必要である。カンボジアの出稼ぎ労働者のなかには、これらを整えるため、土地家屋を売り払って一家で移住した人もいると聞いた。しかし、こんな状況だから、旅券も持たず、不法越境する人たちも多いという。自然と手

引きする業者も現れる。ここでも労働者側は金をむしりとられる。

突然の帰国ラッシュの事態に両国政府が腰を上げ、カンボジアのフン・セン首相は旅券取得料を一気に4ドルに下げ、20日以内に発給すると約束した。タイ側も労働許可証を速やかに発給できるように、また料金も引き下げを明らかにし、ようやく、落ち着きを取り戻しつつある。しかし、この騒ぎはカンボジア人労働者に大きな傷を残した。土地や家財を売り払ってしまった人には、帰国後、住む家もない。そうでない人々は業者から前借りしてきた人も多いらしく、残ったのは借財ばかりといった話を聞かされた。

メガモールがオープン

プノンペンでは建設ラッシュが続いていた。あちこちで高層ビルが姿を現し始め、地価も上昇中である。昨年、市内で最も高い地価は、1平方メートルあたり5,000ドルだったが、ことしに入って一気に8,000ドルになったという。これが事実なら、品川区の商業地域の平均価格並みの高さである。

州都 プレイベンでの仕事を終えて、1週間ぶりにプノンペンに戻ったとき、バサック川沿いに建設中だった日本の小売業界大手、イオンのプノンペン1号店がちょうど完成し、開店記念の特別セールを実施中だった。3階建て、売場面積など68,000平方メートル、1,400台分の駐車場を備えたメガモールの出現である。周辺には、高層の高級マンション（下の写真）もでき、街の景観が変わりつつある。



富裕階級の象徴となった感のあるランドクルーザーに家族を乗せてやって来る客、一方では、ゴムぞうりを履いて物珍しそうに店内をただ歩いている客。所得の格差は歴然としている（右の写真）。市内には、体力増進用のトレッドミルを売るスポーツ店も増え、肥満や糖尿病予防への意識が芽生えてきて、生活の

向上をうかがわせる。

そうした社会状況の変化を背景に、カンボジア人の消費行動に変革を、と経営者側は思っているようだが、その対象は、多分、数少ない富裕層だけだろう。庶民の日常生活にあまり関係のない商品の並ぶこの大型小売店が一般市民にとって結構なのは、行き届いた店内の冷房だけのようにだった。



《ボールや文房具届けました》

KEAF のサッカー教室の指導をお願いしている小林俊文さん（群馬県立渋川青翠高校教諭）のご尽力で、群馬、栃木はじめ各地の学校から寄せられた沢山のサッカー、バレーの用具や文房具などを子供や生徒たちに届けました。寄付してくれた高校生や中学生、学校関係者、企業の皆様にあらためてお礼を申し上げます。

プノンペン近郊のトゥールサンボウ小学校には、新品および使いかけの鉛筆、ボールペン、鉛筆削り、新品のノート、メモ帳などを届けました。どれも足りなかったり無かったりしたものだったようで、こちらがびっくりするほど、感謝されました。

寄付いただいた品物はまだ沢山残っています。今回の訪問で配ったのは一部です。大部分は船便で活動を支援してくれる日本語ガイドのソワンさんの自宅に送りました。私たちがプノンペンに着いたまさにその日に通関手続きを終えて到着しました。秋以降の訪問で各学校に届けることにしています。

《教科書支援が累計 10,126 冊》

教育省からの無償配布の教科書が地方にもかなり届くようになりましたが、まだ十分ではありません。小中校を中心に支援を継続してきた結果、今回の支援分で記録が残っている08年以降の支援総計は1万冊を突破し、10,126冊となりました。

ありがとうございました

(2014年6月1日～8月31日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(神奈川) (神奈川) (東京) (神奈川) (東京) (東京)
 (東京) (東京) (東京) (東京) (東京) (東京) (東京)
 (東京) (神奈川) (神奈川) (群馬) (神奈川)
 (東京) (東京) (東京) (東京) (埼玉) (東京)
 (大阪) (埼玉) (東京) (東京) (秋田) (千葉)
 (埼玉) (埼玉) (福島) (東京) (千葉)
 (神奈川) (千葉) (千葉) (大阪) (東京) (東京)
 (神奈川) (大阪) (東京) (東京) (千葉) (神奈川)
 (熊本) (東京) (東京) (東京) (秋田)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。

◇物品の支援ありがとうございました

◎ (朝霞市)、(NY在住) : 鉛筆 3ダース、ボールペン 40本、消しゴム 40、鉛筆削り 15、メモ用紙 9冊、クリップ 100個、ナチュラルバッグ 2。

◎ (東京) : ボールペン、ノート、メモ帳など多数 (段ボール 1箱)。

右の写真 : トウールサンボー小学校。机の上にはノートも鉛筆もない学校が多い (3頁右段の記事を参照ください)。



◇Too little, too late, too much money

どこへ行くポル・ポト裁判

ポル・ポト政権の大虐殺を裁く国連・カンボジア政府合同の特別法廷が8月、同政権の元幹部2人に終身刑を言い渡した(死刑はない)。奇跡的に虐殺を免れたが肉親や親戚、友人を多数失った人たちの間には「やっと正義がもたらされた」という思いもあったようだが、大方の反応は「Too little, too late, too much money」だったと伝えられている。

判決を受けたのは、ポル・ポト政権ナンバー2の元人民議会議長ヌオン・チェアと元国家幹部会議長ながら実権はあまりなかったキュー・サムファン。最高指導者ポル・ポトは内戦終結の直前に死亡(仲間割れで毒殺されたともいわれる)。大量虐殺に一番深くかかわったとされる元参謀総長タ・モクは投降後、裁判が始まる前に病死。

起訴されたイエン・サリ元副首相兼外相は審理中に死去、妻のイエン・チリト元社会問題相は認知症で審理から外された。被告はそろって大虐殺にはかかわっていないと責任を回避。つまりポル・ポトやタ・モクがやったのだらうというわけだ。責任追及は空回りの感がぬぐえない。どんな判決がでても「too little」である。

大虐殺が起こったのは彼らが全土を支配した 1975 年 4 月から 1979 年 1 月まで。それから 4 半世紀が過ぎ去った。

被告たちは 80 歳を超え、虐殺を生き延びた人たちも多くは他界、国民の多数は恐怖政治を体験していない。

特別法廷設置を国連が呼び掛けたのが 1999 年。法廷の捜査・審理の範囲をなるべく制限しようとするカンボジア政府の抵抗で話し合いは難航、2008 年活動を開始、2011 年 4 元幹部を起訴、生き残っていた 2 被告に今回やっと判決。「too late」だ。それも対象は大虐殺のうちの一部の犯罪だけ。被告側は多分、控訴する。いつまで続くのか。

これまでに同法廷にかかった経費は 2 億ドル (210 億円、日本は最大の拠出国)。「too much money」である。

この裁判を支えた NGO が「カンボジア資料センター」(DC-CM-ヨウク・チャン代表)。米イエール大学の支援で 1999 年開設。これまでに大虐殺に関する政権の内部資料の発掘をはじめ各種の記録、資料、写真、ビデオ、インタビューなど数 10 万件をデータベースに収めている。特別法廷の捜査、審理はこのデータがあって可能になった。

大量のデータのなかにはフン・セン首相率いる現政権の幹部がポル・ポト政権のもとになったクメール・ルージュ(カンボジア共産党)一員としてポル・ポト派と深くかかわっていたことを示すものも含まれているといわれる。これが表に出ることを阻もうとして、カンボジア政府が特別法廷の権限を制約しようとしたとされている。

※写真つき奨学生紹介の 4、5、6、7 頁は個人情報保護のため省略